

バイアーズ ベツィイ Betsy Byars 一九二八—
 アメリカの児童文学作家。野生動物への愛を描いた『黒ギツネと少年』(一九六八)で認められる。その後、ユーベリー賞を受けた『白鳥の夏』(七〇)や、『The Eighteenth Emergency 18番目の非常時』(七三)、『うちへ帰ろう』(七七)、『The Night Swimmers 夜の泳ぎ手』(八〇)など、思春期に揺らぐ心の不安や問題児の悩みを捉え、人生の曲り角を克服していく姿を、軽いタッチで描く。ティーンエイジャーに親しまれている社会性を帯びた現代リアリズム作家である。(原 昌)

バイコフ ニコライ・A

Николай Аполлонович

一八七二—一九五八 狩猟家、作家。キエフの軍人の家に生まれる。チフリス士官学校卒。ロシア科学アカデミーの命で、軍務のかたわら満州の自然調査に従事。革命後中国に亡命、一九二二年よりハルビンに住む。四〇年「満州日日新聞」に掲載された『偉大

なる王』(一九三五)は、菊池寛から満州の『ジャングル・ブック』として高く評価され、当時のベストセラーとなる。満州の原生林に君臨した、額に「王大」の二字をもつ猛虎の一生の物語で、そこに棲む動物の生態を緻密な目で捉え、過酷な密林のおきて、厳しくも美しい自然を鮮やかに伝えている。四一年「大東亜文学者大会」に満州国代表として来日、『さわめく密林』(三八)、『牝虎』(四〇)、『我らの友達』(四一)、『Червий kanuman 黒いカピタン』(五九)などがある。戦後オーストラリアのブリスベーンに移住、若き日の夢を残す満州への思いをつづった『野獸と人』(五九)を絶筆に、同市にて死去。

灰谷健次郎

けんじろう 一九三四—(昭9-) 児童

文学作家、詩人。神戸市に生まれる。大阪学芸大学在学中詩誌「輪」の同人となる。一九五六年卒業後、小学校に勤務しながら詩や小説を書く。竹中郁、坂本遼、足立巻一編集の児童詩誌「きりん」に感銘を受け、子どもとのつながりのベースをつかむ。以後その編集を手伝いながら、児童詩教育に力を注ぐ。七〇年兄が自殺。母も後を追うように逝く。すべてに挫折感を強く覚え、七二年一七年間勤めた小学校を辞す。アジア、沖縄を歩き、ひたすら自己をみつめる。自然と一体になつて暮らす人々の樂天性に肌で触れることにより、教室で接してきた子どもたちの生命力を思い出す。そ

のことを契機に長編小説『兎の眼』を書きはじめ、四年理論社より出版される。素朴にたくましく生きる子どもたちを体当たりで受け入れる新任の女先生の熱いドラマが反響を呼び、翌年日本児童文学賞新人賞を受賞、七八年国際児童年ための国際アンデルセン賞特別優良作品に選定される。またテレビによる映像化、中山節夫監督の映画化もされる。『兎の眼』以後絵本や童話で貫して子どもたちの優しさと遊びの世界を描く。七八年、長編としては二作目の『太陽の子』を出版。小学六年生の少女が父の心の病を通して社会と人間性に目覚めていくドラマが前作以上に大きな反響を呼び、テレビ化や映画化(浦山桐郎監督)や劇化がなされた。自ら労働してパンを稼ぐことを実践するため、八〇年より淡路島に移り住み、自給自足の足場を固める。『ひとりぼっちの動物園』(一九七八)で七八年度小学館文学賞、七九年度山本有三記念第一回路傍の石文学賞を受賞。八〇年ころより大人向けの文芸誌に短編を発表。子どもと大人の接点を考えさせる秀作として『子どもの隣り』(八五)にまとめられる。絵本に『ろくべえまつてろよ』(七五)、童話に『マコチン』(七五)、エッセイに『わたしと出会った子どもたち』(八二)、詩集に『兎は運河を渡っていた』(七二)など。

「兎の眼」^{うさぎ} 長編小説。一九七四年刊。小谷先生といふ新婚一〇日目の新米教師と小学校の裏にある塵

芥処理所の長屋に住む子どもたちとの触れ合いを描いたもの。白井鉄三は学校の中で孤立し、一言も口をきかず、いきなり暴力を振るう。どうして鉄三がハ工に對して異常なまでの関心を示すのかを解き明かす努力の中で、小谷先生は鉄三の心を少しずつ理解し、鉄三のもつ優れた可能性を発見していく。また知恵遅れのみなこに自ら心を開いて触れ合うことにより、みなこの美しさに打たれ、同時に学級の子どもたちの優しさに気づいていく。

(松田司郎)

梅堂国政 ^{ばいどう} 一八四八—一九二〇(嘉永1—大9)
浮世絵師。本名竹内栄久。幼名朝太郎。号香蝶樓、豊斎など。江戸日本橋生まれ。一一歳で三世豊國に弟子入り、師の歿後、二世国貞に師事。最初は四世歌川国政を襲名し、やがて国貞(三世)を襲名したが、一生梅堂の号を用いた。豊原国周と並び、歌川派の最後を飾る浮世絵師。昔嘶、なぞなぞ集ほか、絵本の挿絵、双六、おもちゃ、絵など、少年少女向けの木版出版物を数多く制作し、羽子板絵にも手を染めた。とくに大正初期まで梅堂が描き続けた組上げ燈籠絵は、当時の青少年たちを熱狂させ、明治の下町風物詩にまでなった。

ハイネ ヘルメ Helme Heine 一九四一— 西ドイツのイラストレーター、絵本作家。長年の外国生活で、演劇関係の仕事や、英文新聞雑誌のイラスト、装丁を

手がけた後、一九七五年より西ドイツで、子どもの本の作家、画家として活躍はじめた。最初の自作絵本『象さんのおだん』(一九七六)の成功以来、短期間に多数の絵本を発表し、今日では、トミ・ウンゲラーやヤーノ・シユなどと並ぶ、ファンタジー豊かなユーモア絵本作家として認められている。
(佐藤真理子)

パイル ハワード Howard Pyle 一八五三—一九一
一 アメリカの物語作家、挿絵画家、挿絵画教師。デラウェア州ウィルミントンに皮革商の息子として生まれた。恵まれた環境のもとで、文学と芸術に造詣の深い母親の影響を受けて育ち、のち、フライデルフィアの美術学校で絵の基礎訓練を受けた。一八七六年、バージニア沖の島を訪れた時の印象をもとに構成した挿絵入りエッセイが「スクリブナー」誌に採用されたのを契機に、「セント・ニコラス」誌や「ハーバー」各誌に挿絵や挿絵入り物語を書く仕事が本格化していった。パイル独特の挿絵をつけて出版した『ロビン・フッドのゆかいな冒険』(一八八三)はロビン・フッド伝説を主題にしたバラード類をまとめたものである。続いて、昔話や民話の再話集『Pepper and Salt』(リュウト・塩) (八六)、『The Wonder Clock ふしきな時計』(八八)を出版したが、いずれもパイルの充実期の作品である。やるに、アーサー王伝説に取り組み『The Story of King Arthur and His Knights』アーサー王と騎士た

ちの物語』(一九〇二)をはじめとする四部作を完成した。絵画的描出法による文章は勇壮な挿絵と一体となり、騎士道精神を生き生きと伝える文学的香りの高い作品になっている。再話作品群のほかに、中世を舞台にした歴史物語『銀のうでのオットー』(一八八八)や『Men of Iron 鉄の騎士』(九二)があり、パイルの中世へのあこがれをうかがわせる。パイルは、短編から長編に至るまで合わせて二〇〇近くの作品を手がけ、作品に添えた挿絵は、ほかの作家の作品への挿絵も含めると三三〇〇を超えるという。一九一〇年、家族とともにフィレンツェに移り、翌年その地で歿した。

(橋本紀美代)

ハウ アンニー ライオン Annie Lion How 一八五二—一九四三 保育専門家。アメリカ、ボストンに生まれる。一八七八年シカゴ、フレーベル協会保母伝習学校卒業。八七年来日。八九年関西地方に頌栄保母伝習所、頌栄幼稚園を開設し、自由独立の精神をもつたキリスト教幼児教育を展開。フレーベルの二大著書『母の遊戲及育児歌』(一八九七)、『人の教育』(九八)を翻訳し、日本にフレーベル精神を正しく紹介しました『幼稚園唱歌』正統編を編んだ。
(大久保みどり)

ハウゲン ポール・ヘルゲ Paal-Helge Haugen

一九四五ノルウェーの詩人、作家。ノルウェー南部のセテスダール地方に生まれ、大学では医学を専攻し

たが、学生時代から日本の俳句に興味をもち、俳句の翻訳などを手がけた。『Anne アンネ』(一九六八)は、一九世紀を舞台に、結核で死んだ実在した少女の一生を、病院のカルテなどを交えて克明に描写したドキュメンタリズムの作品。この作品でハウゲンはノルウェー文化審議会賞を受賞した。

(山口卓文)

ハウストフスキーロコンスタンチン・Г Константи́н Георгиевич Паустовский 一八九二—一九六八 ロシア・ソビエトの作家。鉄道員の家に生まれ、父の勤務地を転々とする。第一次世界大戦でモスクワ大学を中退した後、運転手、工場労働者、通信記者などさまざまな職業を経験し、また旅行癖からロシア各地、外国を旅する。中学時代から文才を現すが、開拓と建設をテーマにした『Kara-Бугаз カラ・ブガース』(一九三三)を出版後本格的な作家生活に入る。作品はエキゾティックなもの、自然の驚異とそこに住む人間の営みや、芸術家・文学者の生涯を描いたもの、紀行、回想

とジャンルは多様だが、作品に流れる抒情性と文体の美しさから散文の詩人と呼ばれ、数十編の珠玉の短編はとくに広く愛読されている。『あなたのはな』(三九三〇年から書かれた多くの児童文学作品も、ヒューマニズムに貫かれ、しみじみと心を打つものがある。

ハウプトマンゲールハルト Gerhart Hauptmann 一八六二—一九四六 ドイツの劇作家、小説家。ドイツ自然主義の代表的作家で、一九二一年にノーベル文学賞を受けた。数多い作品の中で児童文学の領域に入れることができるものとしては、「一幕の夢の詩」と銘打ち、ロマンティックな雰囲気を漂わせる『ハンネレの昇天』(一八九三)と、中世伝説の英雄を扱った散文の作

(服部素子)

ハウプトマンゲールハルト Gerhart Hauptmann 一八六二—一九四六 ドイツの劇作家、小説家。ドイツ自然主義の代表的作家で、一九二一年にノーベル文学賞を受けた。数多い作品の中で児童文学の領域に入れることができるものとしては、「一幕の夢の詩」と銘打ち、ロマンティックな雰囲気を漂わせる『ハンネレの昇天』(一八九三)と、中世伝説の英雄を扱った散文の作

品『Parsival パルジナル』(一九一四)と『Lohengrin ローヘングリン』(一三)があげられる。(関 楠生)

バウマン ハンス Hans Baumann 一九一四～ 西ドイツの児童文学作家、詩人、ロシア文学翻訳者。今日のチエコスロバキア国境に近い上フアルツ地方に生まれ、バイエルン森の小学校教師として勤めるかたわら、青少年向きの歌を作詞作曲した。その詩歌が、ヒトラー・ユーゲントの行進の際に歌われたため、

バウマンは、戦後の児童文学作家としての再出発に当たり、過酷な批判を受けた。子どもの本の処女作『Das Kind und die Tiere 子どもと動物たち』が一九四九年に出た時は、三五歳でかなり遅い出発だったが、五一年に『コロンバスのむすこ』、五三年『大昔の狩人の洞穴』、五四年『草原の子ら』と次々大作を発表し、ドイツ児童文学界に歴史小説家としての位置を固めた。

その後、第二次ボエニ戦争を象使いの少年の目を通して描いた『ハンニバルの象つかい』(一九六〇)や、ダイダロスとイカロスの伝説をもとにした『イーカロスのつばさ』(七八)など、広い視野に立つ小説を書き続け、むしろ、英語圏や日本などの海外でその真価を認められている。歴史を題材とした青少年向きの読み物に加え、『Kasperle hat viele Freunde カスペルとたくさんのとむだむ』(六五)など幼年向きの読み物や、『Wer Flügel hat kann fliegen 翼があれば飛べる』(六六)を

はじめとする子どものための詩の本に、ミヒルの絵による『Mischa und seine Brüder ミーシャとその兄弟』(八四)ほか数多くの絵本を合わせると、すでに五〇冊以上の創作が発表されている。さらに、ロシア語の子どもの本の翻訳紹介にも力を入れている。

(佐藤真理子)

包 蕉 (ハイゼイ) 一九一八～ 中国の劇作家、児童文学者。本名は倪慶秩 (ニイチヤンジ)。浙江省に生まれる。抗日戦争を描いた戯曲『釈放』(一九三六)を発表、以後、中学の教師をする一方で創作に従事。『マッチ売りの少女』にヒントを得た『雪夜夢』(三九)は上演を重ね好評を博した。一九四六年から創作に専念し、『ほたると金魚』(五八)など多くの名作を著す。これら一連の創作に対し、第二次全国少年児童文芸創作の栄誉賞が贈られた。

(中島久美子)

馬 海 松 (かいじょう) → マ ハーリン

バー カート ナンシー・E Nancy Ekholm Burkert 一九三三～ アメリカのイラストレーター。水彩画やコンテなど、多様な技法を駆使して主に絵本の挿絵を多く手がけている。アンデルセンの『ナイチンゲール』の挿絵(一九六五)が翌年イラストレーター協会の金賞を受賞、『白雪姫と七人の小人』(七三)がコールデコット賞次点に選ばれるなど、優れたイラストレー

(早川敦子)

芳賀まさお (はさわ) 一九〇五・六五(明38～昭40) 漫

画家。本名真雄。青森県弘前市に生まれ、東奥日報社漫画担当記者を経て上京、一九四二年川端画学校を卒業。三九年四月から二年間、講談社の漫画絵本に『カバサン』を連載。吉本三平亡きあとその画風によつて人気漫画『コグマノコロスケ』(『幼年俱楽部』)の連載を

引き継ぐ。漫画単行本『ドウブツ学校』(一九三九)、『南極のベンちゃん』(四〇)、『愛犬トッヅ』(四二)など。

戦後は『かばせんせい』(五七)、「たのしい一年生」など連載、ほのぼのタッチの画風を擬人化させた動物たちが優しい。女婿は漫画家の永田竹丸。

(石子 順)

萩原一学 (はぎわら 一九一〇) (明43) 児童文

学作家。本名安治郎。東京浅草の材木問屋に生まれ、九歳で深川の木場に移る。商業学校卒業。一九三七年

小説『遊女解放令』が「週刊朝日」に入選、「文学界」に『台風の底』『商魂記』などを書く。戦後、「幼年クラブ」に『ハトと少年』を発表。以後、歴史少年小説『豊臣秀吉』、長編少年小説『太平の休日』、『木場の少年』などを出版。その作風はヒューマニズムが基調になつてゐる。

(堀尾幸平)

朴和穆 (パク ハム) 一九二三) 韓国の詩人、

童話・少年小説作家。ハルピン英語学院、奉天神学校卒。一九四一年児童雑誌に児童詩が入選して以来本格的創作活動に入る。放送局、新聞社、児童雑誌社に勤

務のかたわら、自由詩論に基づく児童詩(『果樹園の道』など)を数多く発表し、高い詩精神を追求した。また、散文分野ではキリスト教的理想的理想主義ともいうべき作風を保つてゐるが、主人公の類型化という難点もみられる。韓晶東児童文学賞、大韓民国児童文学賞を受賞。

博文館 (はんぶんかん) 一八八七年(明20)に大橋佐平が設立

した明治半ばから大正期にかけての我が国の代表的な

総合出版社。専門雑誌に掲載の論文をまとめた『日本

大家論集』の成功を契機として、「太陽」「文章俱楽部

」「文章世界」「中学世界」「幼年画報」「新青年」「講談

雑誌」「野球界」「農業世界」など、あらゆる分野にわたる五大雑誌を発行するまでの発展を遂げた。書籍

出版については、『紅葉全集』『一葉全集』といつた全

集のほか、坪内逍遙、永井荷風、田山花袋などの文芸

単行本などを発行している。児童書部門では、九一年、

『少年文学叢書』の第一編として、巖谷小波の少年読

み物『こがね丸』を発行したのがきっかけとなつて、

その後、小波のお伽噺類を数多く刊行したばかりでな

く、小波自身が博文館へ入社し『少年世界』『少女世界』

『幼年世界』誌の編集をするに至つた。第二次大戦後、

博文館新社として再出発し、主として日記類の発行を

手がけている。

羽衣伝説 (はこうせつ) 話の型としては「天人女房」と呼ば

(金平聖之助)

れる異類婚姻譚。また世界的に分布している白鳥処女

説話と共通した伝説である。天女が山奥の沼(川や海)で水浴びをしているのを男がみて一人の天女の羽衣を隠してしまう。天女はやむなく男の妻になる。子どもが生まれ数年の月日を経過する。そして羽衣の隠し場所(高倉の稻束の下・天井・檻)が分かり、探し出して子どもを抱えて天上へ飛び去る。この伝説は南方から伝わったものかもしれないが、現在では東北地方まで全国的に分布し、時代的にも奈良朝以前までさかのぼれるくらい古くから伝承されている。また中国の各地にも広く分布する。前記した話型のほかに、男が天上の世界を訪ねるものや、七夕の由来譚となつていてものなどがある。謡曲『羽衣』で一般に知られていることはいうまでもない。

(吉沢和夫)

バージェス ソントン Thornton Burgess 一八七

四一九六五 アメリカの児童文学作家。自然を最良の師として育ったマサチューセッツでの体験が、動物、自然物語を生み出す基礎となる。妻を亡くした悲しみを息子への夜話でいやしたバージェスは、それをまとめて『Old Mother West Wind 西風かあさん』(一九一〇)に発表し、一躍人気作家となつた。我が国でも『バージェス・アニマル・ブックス』として紹介されている。七〇編を超える作品を発表。一万五〇〇〇にのほるコラム記事や児童文学論『秘密をばらす』(四九)

も書いた。

土師清二

一八九三—一九七七(明26—昭52)

作

(島式子)

家。本名赤松静太。岡山県長船町に生まれ、小学校高等科を一年(現在の小学校五年)で退学し、一九一一年上京、三田英学校などで学んだ。一四年新聞社に入り、二三年「旬刊朝日」の創刊を企画して入れられ、二三年、同誌に『水野十郎左衛門』を土師清二の筆名で連載、デビュー作となる。二七年『砂絵呪縛』で人気作家になった。少年ものには『万歳栗毛』(一九三三)、『怪童鴉丸』(三三)などがある。

(上洋二)

橋本ときお

一九三三—

(昭8—)

児童文

学作家。本名登喜男。

石川県

珠洲市

生まれ。

金沢大

学

卒業後、珠洲市で小学校に勤める。一九五九年角山勝義、稗田董平、小納弘らと北陸児童文学協会(児文協北陸支部)を結成、機関誌『つのぶえ』の編集代表となる。以後、広く北陸一帯に居住する多数の会員をまとめて、『日本海の児童文学』の創造と普及を旗印にし、その在り方を追求するとともに地方文化の向上に尽くしている。処女作『トキのいる山』(一九七〇)ではわずかに残った天然の朱鷺を守る子どもや大人たち、『百様タイコ』(七二)では消滅した祭りを復活させようとする子ども群像、『わんぱくクラスは26人』(七三)では僻地の小規模校で元気に過ごす教師と子どもたちというように、能登に生きる人々の姿と思いを淡々と描き続けて

いる。『ひとりぼっちの政』(七二)では、障害児教育をめぐる状況に対し「一石を投じたが、教師像の掘り下げ」の甘さから、障害児差別であるという批判を受けた。

(勝尾金弥)

バジヨーフ パーヴェル・П. Павел Петрович Бажов

一八七九—一九五〇 ソビエトの作家。ウラル地方の村に生まれる。父も祖父も製銅工場の職人であつた。祖母や村の老人たちから昔話を聞いて育つ。神学校を卒業後、国民学校の国語の教師をしながら、長年にわたって、子どものころからなじんでいたウラルの民話、伝説を探詰した。一九三九年六〇歳の時、集めた民話伝説をもとにした物語集『孔雀石の小箱』が出版された。映画、バレエ、オペラでも広く知られていく『石の花』や『ほのおのおどり子』『銀のひづめ』など魅惑的な珠玉のような作品が収められている。これらの作品に登場する石細工の職人、鉱山労働者、働き者の娘たちは自然の化身である銅山の女王や炎の踊り子や青い霧はあさんや水色の蛇と触れ合う。働く者、物をつくる者の心の高さ、強さ、また自然の美しさ、神秘さをうたいあげた作品である。自伝的小説『みどりの小馬』(一九三九)もある。

(北畠静子)

バジーレ ジヤンバッティスタ Giambattista Basile 一五七五?—一六三三 イタリアの詩人、作家。スベイン治下のナポリで生まれ、若いころヴェネツィア

共和国に軍人として仕官した後、宮廷文人として各地を巡り、郷里ナポリが終焉の地となつた。公務として五日物語^{シダメロウ}として現代イタリア語に訳されて以来読者を広げ、イタリアの口承話に計りしれない影響を与えた。ただけでなく、各国の民話研究者の熱い視線を浴び、文学者や劇作家をも刺激した。デカメロン風の枕物語であるが、枕も一つの昔話になつていて点はむしろ『千夜一夜物語』に近い。枕を含めて五〇話を収めるが『三つのシトロン』『おんどりの石』『めす猫シンデレラ』など、そのほとんどがヨーロッパ各地にみられる主要な魔法昔話である。

(剣持弘子)

長谷川時雨 はせがわ 一八七九—一九四一(明12—昭16)

評伝作家、劇作家。本名やす。東京日本橋生まれ。『花王丸』(一九〇七)は女性作家初の歌舞伎座上演脚本となる。ほかに『さくら吹雪』など。「青鞆」贊助員後、「女人芸術」(一八九三)を発行、多くの女流を育てた。死の直前まで銚後奉公の団体「輝ク会」主宰など多方面で活躍。代表作『近代美人伝』(三六)、『旧聞日本橋』(三五)、『長谷川時雨全集』全五卷(四一)、『童話』掲載の児童劇『やつてみつこ』(二五)は戦後の児童劇選

集にもたびたび登場。

(森下真理)

長谷川集平

(はせがわ)
一九五五) (昭30) 絵本

作家。兵庫県姫路市に生まれる。武藏野美術大学中退。

『はせがわくんきらいや』(一九七六)で第三回創作絵本新人賞を受賞。ポスター、本の挿絵なども手がけながら、表現の手段としての絵本の方法論の確立をめざす。

『とんぼとりの日々』(七七)、『7月12日』(八二)な

どのほか、大人向けを意識した絵本『青いドックフーズ』(八〇)がある。また挿絵に『いつちゃんはね、おしゃべりがしたいのにね』(七九)などがある。(長戸優子)

長谷川武次郎

(はせがわ)
一八五三~歿年不詳(嘉永6)

出版人。江戸生まれ。家業は質屋だったが、アメリカ人W・C・ホイットニーが校長時代東京商法講習所中退、外人教師の紹介で知った外人に、自ら日本の昔話を語り英訳してもらい一八八五年『昔噺文庫』(Japanese Fairy Tale Series)として『桃太郎』を第一号とし京橋区日吉町一〇番地より刊行。絵はもっぱら小林永濯。版面を押しもんだりめん本が外人に好評であつた。仏・独・西・蘭訳も出し、巖谷小波『日本昔噺』にも影響したとの説もある。

長谷川町子

(まちこ)
一九二〇) (大9) 漫画

家。福岡県に生まれる。山脇高女卒。一六歳の時田河水泡に師事し、『少女俱楽部』でデビュー。代表作の『ザエさん』は、終戦後の一九四六年から『夕刊フクニ

チ』で連載が開始され、四九年「朝日新聞」夕刊、五一同年朝刊を経て、七四年二月作者の病気により中断するまで続いた。六二年には『ザエさん』で第八回

文藝春秋漫画賞を受賞。そのほかの作品に『いじわるばあさん』『エプロンおばさん』『ザエさんうちあけ話』などがある。

長谷 健

(はせ)
一九〇四~五七(明37~昭32) 小説

家、童話作家。本名藤田正俊。福岡県柳川市生まれ。一九二〇年、福岡師範第一部入学。在学中、胸を病み、文学に専念。三〇年、上京、小学校教師として、小砂丘忠義らの生活綴方運動に参加する。また、今井善次郎、井野川潔らと同人雑誌『教育文学』を出し、多くの教師に影響を与える。三九年、平林彪吾らと同人雑誌『虚実』を創刊して、本格的な文学活動に入る。同誌に発表した『あさくさの子供』で第九回芥川賞を受賞。これを機会に、文学に専念、火野葦平らと交流する。第二次世界大戦の末期、四四年、病に倒れ、郷里の柳川に疎開する。戦後は、「九州文学」の仲間たちと、九州書房を設立し、九州における文学活動に火を灯した。四七年、福岡・柳川を中心にして白秋碑建設の推進役を務め、北原白秋の文学業績を浮上させるとともに、地方文学運動に尽くした。四九年、上京。火野葦平と大田区池上の「鈍魚庵」にて文筆生活に入る。主として児童文学者としての著作活動に専念する。火のくに

の子供』（一九四〇）、『明るい朝』（四二）、『春の童謡』（五〇）、『虹の立たない国』（六一）などを書き、南方的な明るさのにじむ作品を残している。文学作家としては不遇な生活であった。五四年以後、北原白秋・三部作に取り組み、『からたちの花』『邪宗門』を完成する。続いて、『帰去来』の完成をめざし、文学的再起を図ったが、不運にも交通事故に遭い、不慮の死を遂げた。

（加来宣幸）

支部沈黙 （ちはくもく） 一八九一—一九六九（明二十五—昭四四）

詩人、童謡詩人。本名貞助。宮城県生まれ、札幌師範中退。小学校教師を務めた。渡島当別のトラピスト修道院講師として来て三木露風の手引きでその近辺の小学校にも勤務した。一九二八年童謡集『ありのお城』を発刊、これは北海道における児童文学作品単行本の第一号といわれている。生活綴方の指導、児童文集発行にも業績がある。詩集には『路草』（一九三〇）がある。歿後『支部沈黙選集』上・下（七〇）が編まれた。

（加藤多一）

羽曾部 忠 （はそべ ただ） 一九二四—（大十三）—詩人。福

島県会津に生まれる。福島師範卒業。一九四四年長野県に移り、中学校で教鞭を執る。七年上京、教職のかたわら詩、童謡を発表。とくに少年詩の分野で活躍。

童謡集『てぶくろのまど』（一九六〇）、詩集『ぜいたくな空』（七〇）、『ばあさんはふるさと』（七七）などの作

品集がある。「子どもと詩文学会」、本郷文化土の会、会津ペングラブなどに所属。会津詩人協会顧問。

（こわせ たまみ）

パターソン キヤサリン Katharine Paterson 一九三二— アメリカの児童文学作家。中国生まれで、日本にも四年間伝道者として滞在。アメリカに戻り、『The Master Puppeteer 名人形師』（一九七六）など、日本の中世を題材とした小説を書く。その後、『テラビシアにかける橋』（七八）、『海は知っていた』（八〇）で、二度

ニューベリー賞。ティーンエイジャーたちの傷つきやすい心理を捉えつつ、生への幻滅、愛の渴望や憎しみを超えて、やがて自己の価値に目覚めていく姿を描く。そのほか、社会性を帯びた『ガラスの家族』（七八）などがある。

（原 昌）

はたたかし 一九二二—（大十）—児童文学作家。本名秦敬。愛媛県西条市に生まれる。小学生時代は単身松山市で過ごし、中学校以後は東京の父のもとで育つ。法政大学文学部日本文学科に入り、文学への道を志す。現在桃山学院短期大学教授として、児童文学や幼児教育に力を注ぐ。作品は『月夜のはぢどう山』『フジさんのベンキ』（以上一九七二）、『とべ！ねほすけくじら』（七五）など多数。

畑中圭一 （はたなか けいいち） 一九三三—（昭七）—詩人、研究者。北海道岩見沢市に生まれ、一九五五年京都大学

文学部(フランス文学専攻)卒業。北海道、大阪府の高校に勤務ののち、さまざまな社会教育行政の仕事を経て、八四年より大阪国際児童文学館総括専門員。七〇年に『王さまのあくび』を出版。八〇年の『ほんまにほんま』(共著)で第一回日本童謡賞を受賞。八五年『すかたんマーチ』出版。八四年から連載中の『童謡論の系譜をさぐる』など、論文も数多くある。
波多野勤子 (はたの いそこ) 一九〇五・七八(明38)~昭53 児童心理学者。東京都に生まれ、一九三六年東京文理科大学心理学科選科卒業、同大学教育相談部員となり、四八年愛育研究所に転じる。母であり心理学者である立場からの觀察をつづった『少年期』(一九五〇)、『幼年期』(五一)によつて注目され、五四年『幼児の心理』にて第八回毎日出版文化賞を受賞。六四年ファミリー・スクールを創設、理事長として新たな心理学研究を試みた。児童文学の面では、多くの育児絵本のほか童話集『おさかなのうんどうかい』(四六)などがある。波多野完治の妻である。

波多野完治 (はたの けんじ) 一九〇五(明38)~ 心理学者。児童心理学、文章心理学専攻。東京都に生まれ、一九二八年東京大学文学部心理学科卒業、二九年、法政大学講師に就任、後に教授となる。この間、愛育研究所で児童心理学を研究し、『児童社会心理学』(一九三八)、『児童心性論』(四二)などを著し、教育現場に大き

な影響を与えた。四七年東京女高師教授、五〇年お茶の水女子大学教授、六九年同大学学長を経て、七年退任。フランスの心理学研究の紹介に努め、ピアジェ、ワロンの研究の基礎を築く一方、それに関連した文章心理学における活躍が高く評価され、『文章心理学』(三五)などを著した。文部省国語審議会委員、国立国語教育研究所評議員などを歴任し、幅広い研究活動を展開、さらに、ポール・ラングランの生涯教育の理念を紹介しながら、自ら『生涯教育論』(七二)を発表し、教育に関わる心理学研究を前進させる問題提起をたえず行っている。また、戦前から、児童文化、児童文学、視聴覚教育の先駆的研究者としても知られ、『児童文化論』(共著、四一)、『視覚教育論』(四九)、『児童心理と児童文学』(五〇)など、この分野の著述も多い。

旗野十一郎 (はたの じゅういちろう) 生年不詳~一九〇八(?)~明41 (遠藤はる美)
唱歌作詞家。士郎、士朗、士良とも表記し、桜坪と号した。新潟県北蒲原郡の生まれ。東京音楽学校師範部卒業ののち、同校教授(国語・漢文)を務めた。『新編教育唱歌』中の『港』(吉田信太曲)、『川中島』(小山作之助曲)の作詞者として知られ、後者はお手玉遊びに転用されて、昭和初期まで歌われた。主著として、明治期最初の唱歌集『小学唱歌集』全三編の歌詞を評訳した『小学唱歌集評訳』(一九〇六)がある。
(佐藤光二)

ハツカート

ベシガーレ ベンリー ライダー Henry Rider Haggard 一八五六～一九二五 イギリスの児童文学作家。青年のころ、アフリカに渡り、植民地経営に参与した。帰国後『ゾロモン王の宝窟』(一八八五)を発表して成功。その後、多数の作品を残した。当時、彼の作品は評論家には評価されなかつたが、娯楽ものとして広い世代にわたつて読まれた。農業に関する著作物により高く評価され、ナイト爵に叙列された。(越智道雄)

バツク パール Pearl Buck 一八九二～一九七一 アメリカの小説家。宣教師の両親の仕事のため中国に育つ。中国農民の苦闘の生活を描いた『大地』(一九三一)でピューリツァー賞を受ける。この作品と『息子たち』(三三一)と『分裂せる家』(三五)は三部作を成し有名。アメリカ女流文学者として初のノーベル賞を受賞。予ども向けには、『The Big Wave 大波』(四八)や、『The Beech Tree ぶなの木』(五五)があり、そのほかエッセイも数多く。

(藤森かよひ)

ハッチンス パット Pat Hutchins 一九四一～イギリスの絵本作家。ヨークシャーに生まれ、ダーリントンとリーズで美術の専門教育を受ける。広告会社のアシスタントを務めたのち、絵とことばのみ」となチームワークによる絵本『ロージーのおさんぽ』(一九六八)で二六歳で絵本界に登場。『風がふいたら』(七四)でケイト・グリーナウエー賞を受ける。積みあげ物語

の『びっくりパーティ』(六九)、『Titch ティッチ』(七二)など年少者のための機知に富む絵物語が多数あり、夫ローレンスとの共作もある。

(高桑啓介)

パット ジュヌヴィエーヴ Geneviève Patte 一九三六～フランスの児童図書館員。「本の喜び」図書館長。児童図書書評誌「子どもの本の雑誌」編集、資料センター設立、ミュンヘン、ニューヨークでの児童図書館員としての経験を経て、現在、国際児童図書評議会や図書館学会の要職にあり、フランスだけでなくアメリカ、ブラジル、ベネズエラなどでの図書館学を講義、著書に、『Laissez-les lire! Les enfants et les bibliothèques 好きなように読ませて 子どもと図書館』(七八)がある。

初山 滋
（はつやま）

(末松水海子)

は、国家統一期のイタリアの子どもたちのための教科書として、少年期のデ・アミーチスにも影響を与えた。

(安藤美紀夫)

はてなし話 (はてなし)
ばなし テレビなどのなかったころ、炉ばたでの昔話は子どもたちにとつて何よりの楽しみであつた。したがつて子どもたちは次々と昔話をせがんで語り手を困らせたものである。こんな時、語り手は、はてなし話(きりなし話とも)をはじめるのであつた。

「あるところの谷川の川端に、大きな橡の木が一本あつた。その木の木さ実がうんと鉛なりになつた。木もなア、その木さ、ボフアと風が吹いてきた。チモナア、すると橡の実が一つボタンと川さ落ちて、ツップンと沈んで、ツボリととんむくれて(ひつくりかえつて)ツンブコ、カンブコと川下の方さ流れて行つたとさ。すると、また、ボフアと風が」(佐々木喜善『聴耳草紙』)と聞き手(子どもたち)があきあきして眠くなるまで繰り返す。反復は強調の効果をねらつた昔話に特有の語り方であるが、はてなし話の、形式的な反復は逆に單調さで聞き手のきりない催促を巧みにかわす語り手の知恵であつた。

(西郷竹彦)

ハトソン
パッラヴィチーニ ルイージ アレッサンドロ
Luisi Alessandro Parravicini 一八〇〇～八〇 イタリアの児童文学作家。代表作は、一八三六年にフィレンツェ初等教育協会が行つた子どもの読み物コンクールの入選作として出版された『Giannetto ジャンネット』(一八三七)である。ジャンネット少年がへ貧乏人の父と呼ばれる大人に成長する、この模範少年の物語

八六九年イギリスに渡り、経済的にも友人関係にも恵

まれない生活が続く。一九〇〇年イギリスに帰化。南米アルゼンチンの草原パンパスの生物の記録を練達の文章でつづった『ラ・プラタの博物学者』（一八九二）で野外博物学者と文人の名を確立。人間と大自然の交流を描いた『夢を追う子』（一九〇五）に幼少時の原体験を跡づけることができる。多数の著作のうち、アマゾンの神秘的密林を背景に若者の愛を描く冒險物語『緑の館』（一〇四）と、自叙伝『はるかな国遠い昔』（一八）が最も有名。イギリスの鳥類保護協会（Royal Society for the Protection of Birds）は、ハドソンの提唱で誕生（一八八九）、協会のためにハドソンは多数の鳥類保護のための著作を行つた。ロンドンで歿。

（高桑啓介）

バートン・ヴァージニア リー Virginia Lee Burton 一九〇九～六八 アメリカの絵本作家、捺染デザイ

ナー。マサチューセッツ工科大学初代学長の娘に生まれ、カリフオルニア美術学校、ボストンのディミトリオス絵画彫刻学校で学び、恩師で著名な彫刻家ジョージ・ディメトリオスと結婚、二児を得る。『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』（一九三七）は家の近くを走るグロスター線の機関車をモデルに長男アリストイジーズのため、『マイク・マリガンとスチーム・ショベル』（三九）はグロスター高等学校の新校舎の地下を掘ったショベル・カーをモデルに次男マイケルのため、というようにほぼ全作品我が子のため身近なものを素

材につくられた。コールデコット賞受賞『ちいさいおうち』（四二）は道路端から奥の静かな土地に我が家を移したのを描く。近隣の婦人に染色教室「フォリ・コウブ・デザイナーズ」を開き捺染デザインを研究、その優れたデザイン感覚と研究熱心は絵本制作の隅々に及び、木炭画、石版画、スクランチボード、水彩画などを使い分け、地球と人類文化の進化を描く『せいめいのれきし』（六二）では八年をかけ、『Song of Robin Hood ロビン・フッドの唄』（四七）では中世のアルティザンの精神と技を学び、家の庭にミニ中世植物園をつくり観察、中世装飾写本風にしあげた。若き日バレリーナを志したが絵はダイナミックな流動感にあふれ、文と絵の調和は理想的完成を遂げている。一九六四年に来日。（吉田新二）

（吉田新二）

花岡 大学 はなおか 一九〇九～八八（明治四十二～昭和六三）児童

文学作家、仏教文學者。大阪市に出生。如是と命名、のちに得度して大岳と改名。大学は筆名ほかに秉田

新二郎。一歳より奈良県吉野川沿いの淨土真宗寺院で「赤い鳥」「金の船」（『金の星』や大人の文学に親しんで

早熟な少年期を送る。龍谷大学史学科卒業後、小学校代用教員、訓導を経験して子どもに関心をもつ。童話を「大毎コドモ」へ執筆。一九三六年上原弘毅と童話作家連盟（のちに童話作家クラブ）結成、「童話作家」発行。三八年下畠卓と交代で「新童話集団」発行。三九

年新児童文学集団に下畠卓、岡本良雄らと参加。二度の兵役の最初に東大寺の清水公照と会う、中国で敗戦を迎える。戦後、物資不足の中で七人の男児を養育し創作に励む。四八年福田定一（司馬遼太郎）、寺内大吉、石濱恒夫ほかと同人誌「近代説話」をはじめる。子ども番組連続放送劇にも活躍。五九年より旺盛な児童文学創作活動を展開。大淀高校を経て京都女子大学家政学部児童学科助教授、七四年教授で定年退職。この間、仏教童話、仏典童話に境地を拓き、のちのライフワークとなる。七三年一切の会を退会、「すねいる」「近畿児童文化」「幼年芸術」を解散し、個人誌「まゆーら」を創刊する。『かたすみの満月』により六〇年未明文学賞奨励賞、『夕やけ学校』で六一年小学館文学賞受賞。

羽仁もと子
はに
もとこ

『花岡大学仏典童話全集』全八巻（一九七九）、『花岡大学童話文学全集』全六巻（八〇）。
（斎藤寿始子）

話方研究けんさく 童話作家で口演童話家だつた松美佐雄が主事となり、一九二四年に創設された日本童話連盟の機関誌。二五年（大14）四月に創刊、四一年（昭16）九月号（第一七巻九号）で、戦時下の統制により廃刊。松美は、はじめ蘆谷蘆村らの日本童話協会の会員だったが、それまでの口演童話のいき方に批判をもち、童話を家庭と学校に返すべきだと主張した。この機関誌の編集を通して、その主張を実現しようとした。

（富田博之）

バニヤン ジョン John Bunyan 一六二八—一八八

イギリスの宗教作家。家業の鋳掛屋を継ぎ生業としたが、妻の持参していた宗教書によつて信仰に目覚め、聖書を熱心に読んで教員となつた。無許可で説教をしたため秘密集会禁止法に触れ、一二年間投獄生活を送つた。その中で、信仰体験記『恩寵あふるるの記』（一六六六）を書いた。主著『天路歴程』が書きはじめられたのは、二回目の監禁中であつた、（第一部七八、第二部八四）。『天路歴程』は、著者のみた夢を、クリスチヤンという主人公の遍歴を通して語つてゐる寓意物語

で、「破滅の都」「失意の沼」「屈辱の谷」「死の陰の谷」「虚榮の市」などを巡つて「天の都」にたどりつく。二部では、妻子が後を追つていく形をとつてゐる。物語の構成が自然で、性格描写が変化に富み、簡潔、素朴な文体で、ユーモアもあり、子どもにも読みうる作品となつた。一八世紀の小説文学勃興に力があつた。子どもには、一種の冒險小説でもあり、ファンタジーとも受け取られていた。一九世紀の子ども部屋で認知された数少ない一冊である。『A Book for Boys and Girls, or, Country Rhymes for Children』少年少女のための詩集』(のちに『Divine Emblems 宗教詩画集』)として知られる。八六年初版)は、子どものための詩集である。

バーニングガム ショーン John Birmingham 一九三六年イギリスの絵本作家。最初の絵本『Borka ボルカ』(一九六二年)でケイト・グリーナウエー賞を受賞する。その後『ガンピースさんのふなあそび』(七〇)でも同賞を再受賞している。四季の移り変わりを描いた『はるなつあきふゆ』(六九)や、ことばと絵が一体になつた本として賞を受けた『おじいちゃん』(八四)のほか、小さい子どものためにフリーズ形式の本も制作している。

(田中瑞枝)

ハーネット シンシア Cynthia Harnett 一八九三年イギリスの児童向き歴史小説家、挿絵画

家。田舎の生活を詳細に描いた絵本をはじめ、歴史に埋もれた「普通の人々の普通の生活」を語り描いた。確かな時代考証に基づいた風俗の描写には定評がある。一八世紀初頭の建築を題材にした『邸宅』(一九四九)や、イギリス近代の産業社会を支える羊毛産業について描いた『羊毛の棚』(五二)などが代表作。後者の作品は、カーネギー賞を受ける。

(藤森かよ)

文学作品で、はじめは当時の人気児童雑誌「セント・ニコラス」に連載されて大成功を収めた。以後彼女は子ども向けにも書くようになるが、大人向けの作家としても有名な作家であった。八七年にはやはり子ども向けに『Sara Crewe セーラ・クルーウ』を書き、一九〇二年にこれを『小公女』として劇化、さらに原作に加筆して○五年劇と同名の小説として発表している。この間、バーネット医師との関係は疎遠になつておらず、フランスはイングランド南部に家をもつて別居状態となつていた。一八九八年にはスワン・バーネットと離婚。一九〇〇年には若い俳優スチーブン・タウンゼンドと再婚するが、すぐに別居している。○九年に彼女は『秘密の花園』(一九一二)を書きはじめる。当初さして人気の出なかつたこの作品は現在では多くの批評家から今世紀の代表作の一つとされている。『小公女』はバーネットの作品中最もよく知られ、今でも子どもの中では一番人気があるかにみえるが、批評家からは「感傷的」として評判がよくない。しかし再認識しようというタウンゼンドのような批評家もいる。彼によれば、『小公子』のメッセージは「本当の貴族性は人物そのものの中にある」ということで、その点では一見反対の作品に見える『小公女』も同じ意図をもつといふ。さらに『小公女』は「大人ではなく自分自身の視点から主人公が見られている」点で『小公子』に勝

(アン・スウェイト) という意見もある。『秘密の花園』に至つて、「アメリカの児童文学も……ほぼ完全に教訓性から解放されている」(猪熊葉子)との意見もあるが、むしろ「自然との近親性」(アン・スウェイト)が印象的な作品ともいえる。

【参考文献】定松正・谷本誠剛『英米児童文学読本』(一九八一) 桐原書店
 パノーフ ケーラ・Φ ヴェラ・Ф ベラ・Фелоровна Паннова
 一九〇五～七三 ソビエトの作家。ロストフ市生まれ。早く父を失い、一七歳で新聞記者となり、二八歳から戯曲を書きはじめたが、作家として認められたのは、第二次大戦中の従軍記者の経験を題材にした『道づれ』(一九四六)、それに続く二つの作品で、いずれもスター賞を受けた。さらに一九五三年にソビエトの社会

る(アン・スウェイト) という意見もある。『秘密の花園』に至つて、「アメリカの児童文学も……ほぼ完全に教訓性から解放されている」(猪熊葉子)との意見もあるが、むしろ「自然との近親性」(アン・スウェイト)が印象的な作品ともいえる。

【参考文献】定松正・谷本誠剛『英米児童文学読本』(一九八一) 桐原書店
 パノーフ ケーラ・Φ ヴェラ・Ф ベラ・Фелоровна Паннова
 一九〇五～七三 ソビエトの作家。ロストフ市生まれ。早く父を失い、一七歳で新聞記者となり、二八歳から戯曲を書きはじめたが、作家として認められたのは、第二次大戦中の従軍記者の経験を題材にした『道づれ』(一九四六)、それに続く二つの作品で、いずれもスター賞を受けた。さらに一九五三年にソビエトの社会

(酒井邦秀)

の否定面をえぐり出した問題作『四季』を発表し、注目を浴びた。五五年、これまでの作風をがらりと変え、子どもを題材にした一連の作品を発表。『大好きなパパ』で、六歳の少年の目を通して人生の出会いと別れを詩情豊かに描き出し、姉妹編ともいえる『ワーリヤの思い出』(五九)、『ワロージャの出発』(五九)では、祖国が戦場となつた人々の悲しみを静かに訴えた。さりげない会話や状況の設定で人物の性格を浮き彫りにし、愛の形を巧みに描き分けるパノーワの作品には、ひたむきに生きる人間への賛歌がある。
(金光せつ)

パス ウィリアム William Papas 一九一七—イギリスの漫画家、挿絵画家。ギリシア人の父とドイツ人の母との間に南アフリカで生まれ、欧洲を放浪スケッチ旅行。「ガーディアン」「サンデー・タイムズ」「パンチ」誌に政治漫画を描く。挿絵では、ターナー作『ハイ・フォースの地主屋敷』(一九六五)や、ケイト・グリーンウエー次点賞『教会』(六七)など多数。ほかに『インドからの手紙』(八八)、『イスラエルからの手紙』(六九)などがある。

母と子文庫

(ふはとく)

馬場のぼる のばる 一九二七—(昭二一) 漫画家。本名登 青森県三戸町生まれ、岩手県立福岡中学卒業。土浦海軍航空隊入隊、終戦後代用教員など勤務のかたわら漫画制作を続け、一九四九年漫画家としてデビュー。児童漫画で人気を博すが、「漫画集団」入団の五八年ごろより大人漫画へ移る。ほのぼのとしたユーモラスな作風で絵本も多く描き、代表作に『11びきのねこ』(一九六七)、『きつね森の山男』(七四)、『ぶたたぬききつねねこ』(七八)などがある。
(早川史香)

パーマー シリル E Cyril Everard Palmer

一九三〇—児童文学作家。ジャマイカに生まれたが、大学教育終了後カナダに移住、国籍を取る。オンタリオ州北部の寒村で教師をしながら執筆。『ジャマイカの太陽』(一九七四)を代表とする一連の作品で、自らが生まれ育ったジャマイカの小村を舞台に、押し寄せる近代化の波に戸惑いながらおおらかに生きる村人の姿を、愛情にユーモアを交えて描きあげ、心温まる世界をつくりあげた。

(掛川恭子)

浜田けい子 一九二八（昭三）児童文學作家。本名慶子。大阪市に生まれる。明治大学文学部演劇科卒業後、子ども向けラジオドラマの脚本を書いたが、一九六八年ヤマトタケルノミコトを主人公にした古代歴史ドラマ『太陽とつるぎの歌』を発表して児童文学界に登場した。歴史をテーマにしたものに『野をかける少年』（一九七二）、『みなしご弥八』（八〇）などのほか、SF・ノンフィクションなどの著述もある。

（浜野卓也）

浜田廣介 一八九三—一九七三（明26—昭48）

児童文学作家。本名廣助。山形県屋代村（現高畠町）に生まれる。米沢中学校在学中に短歌グループ「果樹林社」を結成し、「秀才文壇」に短歌や小説を投稿した。そのころ家が破産し、傷心を短歌・小説に託し、文学志望を深くする。一九一四年早稲田大学予科に入学、同級の岡田三郎、下村千秋、水谷まさるらと「屋上会」をつくつて文学修業をする。この年から「万朝報」紙の短編小説に応募をはじめ『零落』『影』『冬の小太郎』などが入選。『途暗し』は透谷賞に入選、「中央文学」に発表されるなど早大英文学科卒業（一九一八・七）まで投稿が続けられる。大阪朝日新聞が募集した「新作お伽噺」に赤名晨吉の筆名で『黄金の稻束』を投稿、一等に当選（一七・六）、選者嚴谷小波にお伽噺の新趣向が評価され、童話への志向を深めていく。卒業後春秋

社の『トルストイ全集』の校正に従事し、思想的に影響を受け、のちの『トルストイ童話集』（一四）『世界教育名著叢書No.4』の労作に展開する。アンデルセン童話を学んだことともに「ひろすけ童話」の作風に底流する。一九年招かれて『良友』誌の編集者・作家となり児童文学に生きる決意をする。毎号童話と童謡を発表、『椋鳥の夢』（一月）、『ひかり星』（三月）、『花びらの旅』（五月）、『黒猫物語』（二〇・一～二二）の他筆名の翻案も書き、他誌に民謡・童謡・童話を寄稿するほど情熱的な活動を続けた。このころの短編童話集『すけ童話・椋鳥の夢』（一一）は第一童話集。精華書院を経て実業之日本社社員のころ第二童話集『大将の銅像』（二三）を出版、関東震災のため退社、以降作家活動に終始する。学年別読本ブームに乗つて『ひろすけ童話読本』（二四・二九）が刊行され、ひろすけ童話の呼称が全国的に普及される。童謡集に東北の子どもの風物をうたつた『小鳥と花と』（二五）がある。二六年童話作家協会の創立に参画、幹事として活動する。このころより幼年向き諸雑誌に幼年童話を寄稿。三四四年に文部省井上図書監修官の依嘱を受け『小学国語読本』の詩教材を執筆した。『ひらがな童話集』（三九）第一回児童文化賞)、『りゆうの目のみだ』（四一）野間文芸奨励賞)などかな童話を主とした。戦時期は日本少国民文化協会文学部参事。戦後『雪国のおんどり』（四八）幼年クラ

「」に連載)、『ひろい世界』(五二「毎日小学生新聞」連載)などの長編童話に力を注ぐ。五三年年にわたる童話制作の功により第三回芸術選奨文部大臣賞を受賞。

五五年日本児童文芸家協会初代理事長に推される。その後歿するまで童話文学の普及と創作活動を推進し、

『ひろすけ幼年文学全集』(二二巻(六一))を編集し、各地へ講演旅行を続けた。歿後刊行の『浜田廣介全集』一二巻(七五〇七六)の二種の全集に『ひろすけ童話』の全容を見ることができる。その特質は、人間愛を追求する善意性を扱う作品が多く、その底を哀切の影が流れるところにある。作者の郷土性に連なる孤高の強さの反面のわびしさの投影でもある。また幼年童話にみられるように七五音数律の基調を文章表現に生かしている。自作に対する厳しさからか、出版の度に推敲を加え、あるいは原題を改める労作を続けたことも特質の一つとしてあげられる。

〔地蔵さまと機おり蟲〕じぞうさまと じきおりむし 短編童話。一九二一年八月作。『大將の銅像』(一九二二実業之日本社)所収。寺裏の藪のそばに立つてゐる石の地蔵は雨風にうたれてもじつと立つて、鼻の先が少し欠けてもにこやかに一点を凝視している。その石地蔵に心をひかれたはたおり虫は、もし人間に生まれ変ることができたら、この地蔵さまのような人間にになりたいと思ふ。晚秋の月光をあびて地蔵の胸につかまる。抒情詩ふうの大

正ロマンの創作童話の代表作。廣介童話初期の秀作。のち短い幼年童話に改作している。

【参考文献】浜田廣介『童話文学と人生』(一九六五集英社)、浜田留美『父・浜田廣介の生涯』(一九八三筑摩書房)

(滑川道夫)

浜野卓也

はまの

一九二六一(大15)

児童文学

作家、評論家。静岡県御殿場生まれ。早稲田大学国文学卒業後、都内の中・高校に勤め、立教大学院で近代文学を専攻、現在山口女子大教授。日本児童文学研究会理事、日本児童文芸家協会理事、日本児童文学学会理事。

一九六四年『みずほ太平記』で毎日児童小説賞を受け、以後しだいに児童文学に重きを置くようになつたといふ。創作では、「科学的認識によるアリズム文学として成立させ、同時に眞に子どもの血をわかるに足る、魅力ある人物を造型したい」(『歴史児童文学について』)願いで歴史小説を多く書く。華やかな天

平文化の底辺に生きる民衆を描いた『東国の兄弟』(一九六九)、平和と自立を求めて環濠集落を築く農民群像を描いた『堀のある村』(七二)、応仁の乱の中で思わず命をたどる少年少女を描いた『とねと鬼丸』(八一小学館文学賞)などがあり、平将門を扱った『草原に叫ぶ』(七一)、足利尊氏の『乱世に生きる』(七三)、新島を救つた流入上平主税の『孤島に日はのぼる』(八二)などは、ヒューマニズムに基づいた読みやすい伝記であ

る。最近では「五年二組」シリーズで現代の少年少女群像を明るく描き、新たな読者層を捕らえている。一方、評論集『戦後児童文学作品論』(八四)は戦後の代表作一五点を取りあげてそれぞれの作家像をも描きながら各作品に的確な評価を加え、「新美南吉の世界」(七三新美南吉文学賞)では、従来の継母不和説や貧困説に明快な反証を示し、以後の南吉研究の貴重な出発点となつた。

はまみつお

一九三三—(昭8)—児童文学作

(勝尾金弥)

家。本名浜光雄。長野県塩尻市に生まれる。信州大学教育学部卒。国語担当教員として長野県内の中学校を歴任。信大在学中、学友和田登ら五名と「信州児童文学会」を結成、機関誌「とうげの旗」を創刊、一九六年、既発表の九短編を収録した第一作品集『北をさす星』を刊、以後、『わが母の肖像』(一九七〇)、『春よこい』(七九)、『かぼちや戦争』(八〇)、『れんげの季節』(八一)を世に送っている。以上のうち『春よこい』は、奥信濃の小学校の冬季分室に臨時教員として赴任した青年教師と生徒、村人らの豪雪との闘いを感動的に描き第九回赤い鳥文学賞を受賞。『れんげの季節』は、太平洋戦争下に生きる農村の子どもの哀歎を描いた一短編を収録し第五回塚原健二郎文学賞を受賞。

(塚原亮二)

三六一 アメリカの児童文学作家。オハイオ州イエロースプリングスの生まれ。現代アメリカの児童文学の質の向上に最も貢献してきた作家といわれ、その一作が注目されている一人。処女作は『わたしは女王を見たのか』(一九六七)。一九七五年には『偉大なるM・C』でニューベリー賞を受賞。自伝的要素の強い『わたしはアリラ』(七七)ほか『Sweet Whispers, Brother Rush ラッシュおじさん』(八一)など多数の作品がある。

ハムスン マリー H Marie Hamsun 一八八一—

(清水真砂子)

一九六九 ノルウェーの舞台女優、児童文学作家。一九〇八年、国立劇場の女優であつた時に作家のハムスンと出会い、翌年に結婚。夫の勧めで作品を書きはじめる。『Bygdebarn. Hjemme og på sæteren』村の子供たち—農場の生活』(一九一四、邦訳名「抄訳」「小さい牛追い」)で東ノルウェーのランゲルッドを舞台に、明るく生きる四人の兄弟姉妹の姿を描いた。『Bygdebarn. Folk og se på Langerud』村の子供たち—ランゲルッドの人々と家畜たち』(五七)は、前出の作品で描かれた家族の一世代後の姿を描いたもの。

(山口卓文)

林 房雄 (はやお) 一九〇三—七五(明36—昭50) 小説

家。本名後藤寿夫。大分市生まれ。東京大学法科中退。第五高等学校時代から共産主義に関心をもち、東大の新人会で活躍。一九二六年处女作『林檎』を「文芸戦

「線」に発表して注目された。第二次大戦中から戦後にかけて大衆文学的傾向の強い小説を多作。児童文学ではブロレタリア児童文学運動時代に活躍、「文芸戦線」の「小さい同志」欄に当初から関係、また自らもミューレンの童話集『真理の城』(一九二八)などを訳出したりして影響を与えた。

(向川幹雄)

林 芙美子
ふみこ 一九〇三～五一(明36～昭26) 小説家。本名フミコ。下関市に生まれ、尾道高女卒業。上京して、女中、女工、事務員、女給などをしながら詩や童話を書き、「一九二九年詩集『蒼馬を見たり』」を刊行、翌三〇年には、生きることの苦しさや悲しさをつづった日記体の『放浪記』が出版されて超ベストセラーとなり、「風琴と魚の町」(一九三二)、「清貧の書」(三二)で作家的地位を確立した。『風琴と魚の町』は、行商人の子の少女が主人公の自伝的な小説で、子どもにも鑑賞できる。続いて、『泣虫小僧』(三五)、「牡蠣」(三五)、「稻妻」(三六)を出版。庶民的な題材と平易な文体、新鮮な抒情で人気を得た。戦後も、水商売あがりの老女の心境を浮き彫りにした『晩菊』(四八)や長編『浮雲』(四九～五〇)に、円熟した技巧の冴えを見せた。児童ものとして、少年小説『啓吉の学校』(四一)、長編童話『お父さん』(四七)や『狐物語』(四七)などがある。

(大久保典夫)

林 柳波
はやし
一八九二～一九七四(明25～昭49)

りゅうは

童謡詩人、教育者、薬学者。本名照寿。^{てるひさ}群馬県沼田市に生まれる。明治薬科大学卒業。その年薬剤師の資格を取得、同大学の講師となり学校の運営にも参画、母校の発展に寄与した。戦争中長野県小布施で公民館長、図書館長を務め、晩年再び母校の図書館長となる。在学中より詩や俳句を書いていたが、一九二三年ころ野口雨情と出会い童謡や民謡も書くようになり、雨情との関係を通して、藤井清水、権藤円立、本居宣長らを知る。高田三九三らの主宰する童謡誌「しゃほん玉」に寄稿。よく知られている『うみ』『うま』『うぐいす』などの歌は音楽教科書(一九四一『ウタノホン』)に発表された作品であるが、学校唱歌の域を超えて広く童謡の世界を歌つた作品も多く、改めて注目される詩人である。著書に『木蓮華』(二九)、「水甕」(三一)、「山彦」(三七)のほか、薬学研究書など多数ある。国民学校音楽教科書編集委員、日本詩人連盟相談役。七二年勲四等瑞宝賞受賞。詩作一千余編。七六年母校沼田小学校校庭に「おうま」の詩碑建立される。

(西條和子)

早船ちよ

はやふね

一九一四～(大31～) 小説家、

児童文学作家。岐阜県吉城郡古川町に生まれる。幼い時より綴方、童謡に興味をもつ。一九二九年、高山女子校高等科卒業の時に小学校正教員検定試験に合格する。この年に最初の童話『松葉牡丹の種子』が「鑑賞文選」に発表される。同年、田中産婦人科病院に看護

婦見習いとして就職する。三〇年東洋レーヨン石山工場に就職、三一年には、片倉製糸下諏訪工場に専監見習いの名目で就職する。この時期の職歴はのちの作品に多くの影響を与える。三三年に上京、三四四年に井野川潔と結婚、学童の學習受験塾を経営、文学とロシア語の基礎勉強をはじめる。四一年、井野川とともに文学同人誌『山脈』を創刊、この年児童文学短編集『七ヒキノコガニ』を処女出版、科学性をもつ幼年童話を書きはじめる。五〇年新作家協会を井野川と創立、「日本文学」に『自発供出』を、『村の婦人会』を「婦人民主新聞」に連載（一九五三まで）など、作家生活に入り、民主的、科学的な視点に立つ大衆性をもつ文学を創造する。五四年には、日本民話、世界各国の民話の研究とその再創造を行う。『キュー・ポラのある街』を雑誌「母と子」に五九年より連載、『山の呼ぶ声』を理論社より同年刊行する。『キュー・ポラのある街』は六一年に出版され、六二年には映画化され、多くの人々に其感をもつて受け入れられた。この作品は『未成年』『赤いらせん階段』『さくらさくら』『青い嵐』の五部作、別冊『キュー・ポラのある街・リスの街』、六部『キュー・ポラ銀座』と書き継がれ、戦後の時代の中で搖れ動きつつ、自分の生き方を求め、現実と闘いつつ成長していく少女を描き、思春期小説の典型として児童文学史の中的位置づけられている。『峠』『湖』『街』（六三）では、戦前の日

本の封建制の中で押しつぶされそなりつつも、自らの生き方を模索する女性像を描き出している。このような、昭和女性史的な大衆小説の追求とともに、埼玉児童文化の会を中心とした児童文化運動、『トーキョー夢の島』（七三）でも公害の追求、世界民話の紹介など、庶民的な立場に立つ活動は幅広い。

「キュー・ポラのある街」^{あるまちポラの}長編連作第一部。一九五九年九月一六〇年一〇月雑誌「母と子」に連載、のちに弥生書房、理論社から刊行。主人公の少女ジユンは鉄物工場に勤める父、貧困にあえぐ母と、不良少年のような行動をする弟とともに、ジユンは、その家庭の貧困をみつめ、母の妹の出産の立ち会いで女性の生理を認識する。また、同様に貧困な仲間の抱える問題や、朝鮮の李ライ恩問題などの現実社会の問題ともかかわる。ジユンは、家庭、社会、人間関係などを自己の眼で正面からみすえ、自らの感性で受け止めつつ自分の生き方を切り拓く。

（大岡秀明）

早物語 かはやもの 息もつがずに早口に一つの物語を語るもの。中世の平曲を語る琵琶法師の余興などからはじまつたものか。内容は笑い話・擬合戯物語（田螺と鳥など）・数えもの・ことば遊び・祝儀ものなどいろいろある。「物語かたり候、めでたいものは芋の種、孫子沢山末広く、ばつぱっと栄えたんの物語」というような小さいものと、反対にむやみに長いものとがあり、昔話

とともに、あるいは落語の中に取り込まれても語られる。

(益田勝実)

バラージュ ベーラ Balázs Béla 一八八四—一九四

九 ハンガリーの作家、詩人、映画美学者。セゲドに生まれ、ブダペスト、ベルリン、パリなどで学ぶ。歌劇台本『青ひげ公の城』(一九一二)はバルトークによって作曲された。第一次大戦直後のクン・ベーラの共産政権に参加、その崩壊後はウェーヴン、ベルリンやソビエトで亡命生活を送る。亡命中に発表した『視覚的人間』(一四)で、映画美学者として有名になり、一時はドイツの映画界で活躍した。第二次大戦後ハンガリーへ帰国、戦災孤児の問題を扱った映画『Válahol Európában ヨーロッパの何処かで』(四七)のシナリオを書き、映画制作の再建に尽くした。児童文学の作品もかなり多く、中でも『Hét mesé』七つのメルヘン』(一八)、『ほんとうの空色』(二五)が最も広く知られている。(徳永康元)

原 昌 しばら 一九三一—(昭六一) 児童文学

研究家、評論家。本名昌一。愛知県生まれ。南山大学文学部英文科卒。中京大学教授。日本児童文学学会理事、イギリス児童文学会会長。一九五六年より児童文学研究に従事し、とくに英米児童文学の日本への受容を研究している。主な著書に、児童文学の笑いとユーモアを構造面から分析した『児童文学の笑い』(一九七四)、訳書に『ぼくたちは幸福だった—ミルン自伝』(七

五)などがある。

(原田直友)

(定松正)

口県生まれ。宇都市に育つ。山口師範を卒業後、上京。教職に携わるかたわら詩作に専心。師、大木実を介して異聖歌、與田準一に交わり少年詩の世界に入る。学生のころから詩を書きはじめ、一九四九年、羽曾部忠らと「子どもと詩文学会」を創設、詩と批評誌「ぎんやんま」を発刊。「赤い鳥」以来の少年詩誌の基盤をつくる。全作品に流れるぬくもりは、自らの温かさと、長い間の教職生活からの、たくまないヒューマニティであろう。『はじめて小鳥が飛んだとき』、『神さまと雲と小鳥たち』(七七)、『じぞうさま』(八三)、『スイツチヨの歌』(七八)などの著作に流れる目は、愛の一語に尽きる。

(羽曾部忠)

原田三夫 はらだ 一八九〇—一九七七(明23—昭52) 科

学読み物作家、科学評論家。名古屋生まれ。はじめ札幌農学校に入学するが病氣で中退。一九一六年東京帝國大学理学部植物学科を卒業。一七年「子供と科学」を創刊するが一年で廃刊となる。一九年には北海道帝國大学講師の職につくも一年あまりで退職。二〇年から翌年にかけて上梓した『子供の聞きたがる話』叢書全六巻の成功により文筆活動に専念した。また、「科学知識」「科学画報」の創刊にも関係し、一四年に「子供の科学」が創刊されると編集主幹に就任。一五年ラジ

才放送がはじまるやいち早くラジオの普及に力を注ぐなど、科学知識の普及・啓蒙活動に活躍した。戦後は五三年に日本宇宙旅行協会を設立して理事長となり、「火星地主実質第一号」となるなど話題を呼んだ。著書は『児童工業物語』(一九二八)、『海』(四一)、『少年科学生語集』(四二)など多数。自伝に『思い出の七十年』(六六)がある。なお、前谷惟光は息子に当たる。

(上田信道)

原抱庵 一八六六—一九〇四(慶應二—明治三七) 小説家、翻訳家。本名余三郎。岩城国(福島県)郡山生まれ。長じて上海に渡り、亞細亞學館に入学したが、まもなくして帰国、札幌農學校に学ぶ。森田思軒を慕つて上京、新聞や雑誌に翻訳、小説を寄稿する。中でも小説『闇中政治家』(一八九〇)で文名を高めた。児童文学にも筆を染め、少年小説『新年』(九二)や伝記物語『大石良雄』(九二)などを書いたが、教訓臭が強く今日によみがえつてこない。むしろデ・アミーチス『十二健児』、『三千里』(一九〇二)、『クオーレ』の抄訳の紹介者として知られる。英語からの重訳であるが、思軒の影響を受け、漢文調の精巧な翻訳文体を成す。晩年は不遇にて、狂疾にて歿す。

(原昌)

原まさる 一九〇六—八二(明三九—昭五七) 口演童話家。本名勝。長崎に生まれる。長崎師範在学中より口演童話研究を志す。長崎お伽クラブ会員および日

本童話協会員を経て、一九二七年上京、東洋大学に学ぶ。三二年朝日新聞社「耳の講演班」の一員となり活躍。講演回数八〇〇〇回に及ぶ。東京放送研究会員になる。五三年朝日児童文化の会を結成、毎月一回の機関誌と本社内での研究会の実施を主宰する。六三年江木武彦の言論科学研究所員となり所内に童話部をつく。主な著書に童話集『やわらぎの鐘』(一九四七)、『お話を本と話し方の研究』(五三)などがある。(川上春男)

バランタイン ロバート Robert Ballantyne 一八二五—九四 イギリスの作家。スコットの作品を世に出した出版業者J・バランタインの甥。処女作『Young Fur-Trader 若き毛皮商人』(一八五六)など、この作家の冒險小説の多くは自らの体験に基づいていている。のちにW・ゴールディングの『蠅の王』(一九五四)にヒントを与えた『さんご島の三少年』(一八五八)によつて当代随一人の人気作家の一人となつた。

(定松正)

バリージェイムズ マシュー Sir James Matthew Barrie 一八六〇—一九三七 イギリスの作家、劇作家。スコットランドの田舎町に、大家族の九人目の子として生まれたが、母親のお気に入りだつた兄が事故死した後、その代役として溺愛され、思い出話の聞き役となり、大人になることへの恐怖心を植えつけられるなど、大きな影響を受ける。こつこ遊びや芝居への情熱は幼いうちから顯著で、J・F・クーパーやバラシタ

インなどの冒險物語がしばしばその材料となっていたが、その関心はそのまま持続し、大学時代に劇評の寄稿をしていたのを手がかりに、まずは新聞記者となる。やがて文筆で身を立てるべくロンドンに出たパリーは、母親から聞いた話をもとにした懐古趣味的な作品で人気を集め、続いて劇作をも手がけて一躍流行作家の地位を築いた。ピーター・パンという有名なキャラクターが、一般大衆の前に姿を現したのは、一九〇四年に『ピーター・パン 大人になりたがらない少年』が初演された時であるが、空を飛ぶなど技術的な困難を伴うこの作品の上演は、パリーがすでに人気の高い手慣れた劇作家だったからこそ可能だったといつてよからう。実際、舞台美術にも一流のスタッフを起用し、観客をあつといわせるしかけを多用した演出効果は画期的で、その後ロンドンでクリスマス公演が三六年近くほどの成功となるが、その不動の人気の土台には、そうした芝居ならではの魅力もあつたのである。パリーはこの初演後、台本を何度も書き改め、二八年にやつと活字にするが、それ以前に物語の形になつた『ピーター・パンとウェンディ』(一九一二)が発表された。これらはともに海賊やインディアンのいるネヴァーランドの物語だが、それとは別にケンジントン公園でピーターが鳥や妖精と一緒に暮らしているという設定のものがあり、告白的な小説『The Little White

Bird 白い小鳥』(一九二)に含まれていて、ピーター・パンの登場としてはそれが最初であった。なおこれは、のちにピーターの出てくる部分だけが、『ケンジントン公園のピーター・パン』(一九六)と題し、ラツカムの挿絵入りで改めて出版された。『ピーター・パン』にはパリーの逃避願望や母親コンプレックスが色濃く現れており、通俗的な感傷や不健康な皮肉が鼻につくところもあって、最近では否定的に評価されることが多くなっている。しかし、まさにその病的な要素のために、同じ病気を抱えた現代の人々の間で一定の人気を保つてゐるのも確かである。子どもたちを惹きつけるピーター・パンのイメージは、多くの場合ディズニーを通してるものであるが、空を飛び、海賊と戦う冒險にはやはり独特の魅力がある。パリーがこの作品を書く直接のきっかけとなつたのは、知人の幼い息子たちとの交遊だつたが、それは冒險の生き生きとした活力の源ともなつてゐる。

「ピーター・パンとウェンディ」Peter and Wendy 童話。一九一一年。ピーター・パンは迷子の少年たちや妖精ティインカー・ベルと一緒にネヴァーランドに住んでおり、決して年を取りらず、空を飛ぶ力がある。物語はウェンディたち三姉弟が、ピーターに誘われてネヴァーランドへいくところからはじまり、フック船長の率いる海賊一味との戦いを経て、ピーター以外の子

ども全員が普通の世界に戻り、ウェンディたちの両親の養子になるところで終わる。

(脇 明子)

ハリス ジョーエル チャンドラー Joel Chandler Harris 一八四八—一九〇八 アメリカのジャーナリスト、児童文学作家。ジョージア州に生まれ、印刷屋の見習いから、南部の新聞『アトランタ・コンステイ

テューション』紙のスタッフとなり、ユーモア記事の書き手として活躍する。やがて、南部の農場で働く黒人たちの間に伝わる物語やことわざを素材とした「リーマスじいや」シリーズ、『ウサギどんキッネどん』(一八八〇)を出版し評判となる。続いて何冊かの「リーマスじいや」物語が発表された。これらの物語は、伝承童話説話集『アメリカのイソップ』として世界的に知られるようになる。黒人英語で記録された最初の黒人民話集であり、リーマスじいやの人間像、黒人英語のもつ独特な表現力、弱いものが知恵とすばしょねり、強いものをへこます痛快さが魅力となっている。そこには虐げられている黒人たちの抵抗と生命力、弱者と強者という構造を生み出し続ける人間社会への鋭い批判が込められている。

ハリス ジョン John Harris 一七五六—一八四六 イギリスの出版業者。書籍販売の見習いを経て、ニューベリー一家の事業を受け継いだ。教訓よりも娯楽に力点を置いて編んだ初期の発行物『The Comic Adventures

of Old Mother Hubbard and Her Dog ハーベー・オバメントと飼い犬の痛快な冒険話』(一八〇五)、W・ロスコウの詩『The Butterfly's Ball and the Grasshopper's Feast カバウチヨウの舞踏会とバッタの宴会』(〇七)など、判型や挿絵に趣向を凝らし、児童書出版に新機軸を打ち出した。

(定松 正)

バルトー アグニア・ル アгния Любовна Бартко 一九〇七—八一 ソビエトの女流児童詩人。モスクワの獣医の家に生まれる。小学生時代から詩才を認められ、学校の壁新聞にたびたび掲載された。一九二五年、国立出版社より処女作『中共の男の子バン・リ』と『こそろぼうの小ぐまのミーシカ』出版。ユーモアのある、子どもの心を内側から捉えた作風で、亡くなるまでの詩はすべて出版されている。日本では、『もえる石』(一九七〇)中に三編の詩が紹介されている。

(宮川やすえ)

バルトス=ヘップナー バルバラ Barbara Bartos - Höppner 一九二三— 西ドイツの児童文学作家。現在はボーランドに属するシュレジア地方に生まれ、戦後、西ドイツに移住した。戦争と故国からの追放という過酷な体験を克服するために、少年少女向きの小説を書きはじめた。初期の作品『Die Töchter des Königsbauern 農民王の娘たち』(一九五六)や、『Entscheid dich, Jo! ヨ、決心しなや』(五九)では、牧歌的な田

園生活や郷土感が主調となつてゐる。続いて『コサツク軍シベリアをゆく』(五九)や『急げ草原の王のもとへ』(六一)など壮大な歴史小説を発表した。これらの作品は、それまでと全く趣を変え、広大な大陸を舞台に、自由を愛する民とそれを屈服させようとするものとの攻防を描き、一九六三年ニユーヨーク・ヘラルドトリビューン賞第一位を得た。七〇年代以降は、主として、幼年向きの短編集などの編集に携わつてゐる。

(佐藤真理子)

パレチエク ヨゼフ Josef Paleček 一九三三—一 チェコスロバキアの画家、イラストレーター。プラハのカレル大学教育学部芸術教育学科卒業。一九六〇年代から個展を開き、好評を得た。七〇年以降絵本の仕事に従事、海外でも多くの本を出版し、さまざまの賞を得てゐる。大胆な明るい色彩、構成が特徴。近年では妻のリブシェと組んで絵本を発表してゐる。その作品には『ちびでぶかばくん』(一九七五)、チャペックの『ソリマンのおひめさま』の挿絵(八〇)などがある。

(保川亜矢子)

韓丘 庸 グヨン ハンゴヨン 一九三四—児童文学作家。京都府向日市生まれ。神戸市立外国语大学卒業、京都朝鮮学校に勤める。在日朝鮮文学芸術家同盟、日本児童文学者協会ほかに所属。『海辺の童話』(一九七三)では在日朝鮮少女の民族意識の成長を取りあげ、『ソウルの春にさよならを』(七七)では六〇年の暗黒時代打破に立ちあがる韓国少女群像をリアルに描いた。各誌に発表した、鋭い歴史認識とヒューマニズム

を見いだされ、彼のもとで仕事をはじめた。『ペール・カストール叢書』の最初の二冊『Je fais mes Masques o面を作る』『Je découpe 切紙細工』(ともに一九三一)は彼女の作品である。ほかにもロシア民話に取材した『Baba Yaga ババヤーガ』(三三)が単純な美しさをみせてゐる。

(石沢小枝子)

パロディ parody 語源はギリシア語paroīdia(替え歌、狂詩の意)。よく知られた作品の語句や文体、作風

などの特徴を模倣し、意識的に面白おかしくつくり変えた詩文のこと。風刺的で、嘲笑的な要素を潜ませることが多い。ルイス・キャロルの『ふしぎの国のアリス』には、教訓歌などを茶化していくつもの替え歌があり、スタイルやウングラーの作品などにも、グリムやアンデルセン童話のパロディ化がみられる。人々によく知られた原歌や原話とのギャップを楽しむわけである。

(原 昌

パレン ナタリー Nathalie Parain 一八九七—一九五八 フランスの絵本画家。キエフに生まれ、モスクワ高等芸術学校で学ぶ。一九二五年文化担当官としてモスクワにきたフランスの哲学者ブリス・パレンと結婚し、パリに移り住む。ポール・フォシェにその才能

に支えられた、朝鮮児童文学に関する評論や翻訳は、隣国への貴重な窓口である。

(勝尾金弥)

方定煥 (ファンサンファン) 一八九九—一九三一 朝鮮の児童文化運動家、児童文学者。号は小波。活動家として三・一独立運動に参加後、民族再生の必要性を痛感し、未来の担い手である子どもたちのために短い生涯をささげた。一九二〇年に東洋大学哲学科に入学。二年後にはグリムやアンデルセンの童話を抄訳した

『愛の贈り物』を発刊。翌年朝鮮初の児童雑誌『子ども』を創刊した。「子ども」はその後作品の発表舞台として数多くの児童文学者を育て、文学史的価値がきわめて高い。また、同年東京で孫晋泰・尹克榮・馬海松・鄭寅燮・尹石重らと「セクション会」を発足させ、童謡・童話の創作と児童問題への取り組みをめざした。

その後も児童の人権擁護を訴える講演や童話口演のための全国巡回、六つの雑誌の創刊編集、少年運動の全

国組織づくり、外国童話の紹介活動、童話の創作と広範かつ精力的に活動を展開し、朝鮮児童文学の先駆者となつた。「子どもの日」の創設者。八〇年に韓国建国褒章受賞。

ハンナーマン (仲村 修) ハンナーマン Norman Hunter 一八九九—

イギリスのユーモア作家。『The Incredible Adventures of Professor Branestawm』トレンインストーム博士の大冒險』(一九三三) 以下のシリーズでよく知られ

ている。発明狂の博士の珍無類の發明は次々と意外な結果を生んで笑いを誘うが、この愉快な話には同時に日常的世間の單調さを告発する意味もある。イギリスの男の子にとくに人気のあるこのシリーズのほかに、フェアリー・テールズに取材する『The Bad Barons of Crashabania』クラッシュベニアの悪い男爵たち』(三三)などもある。

(谷本誠剛)

パンテレーエフ アレクセイ・И·Алексей Иванович

Пантелеев 一九〇八—八七 ソビエトの児童文学作家。本名 A·И·エレメーホフ。ペテルブルグ(現レニングラード)の中流家庭に生まれた。一九一七年の革命に続く内戦の混乱時に両親を失い、浮浪児となつた。

盗みを働いて、浮浪児矯正施設に入れられる。友人の

グレゴーリイ・ベーリイフと処女作『Республика Шкиб

シキート共和国』(一九二七)を書く。自分たちのいた施

設をモデルにしたこの作品は、マルシャークやゴーリ

キーに高く評価された。ほかに代表作として、生きの

いい浮浪児の少年の物語『金時計』(二八)、『うそつき

ワロージヤ』(五一)、長編の自伝小説『リヨーニカ・パ

ンテレーヒフ』(三九)、愛娘の成長を記した『うちの

マーシャ』(六六)、短編『転人生』『渡し舟』(以上四二)

などがある。『金時計』『うちのマーシャ』などは日本

でも広く読まれている。

(北畠静子)

バンナーマン ヘン・Helen Bannerman 一八六

三一九四六年 イギリスの絵本作家。スコットランドのエジンバラで生まれた。従軍牧師の一人娘で、二歳の時両親とともにポルトガルのマディラにいき、一〇年間滞在した。ドイツでの勉学と数年の旅の後、軍医と結婚、三〇年をインドで過ごした。一八九九年、二人の娘を、教育のためスコットランドに連れ帰り、単身、夫の住地に戻る途中、子どもたちとの別れのつらさを紛らすため、一つの絵物語をつくり『ちびくろさんば』と名づけた。それを読んだ子どもたちと友人たちが出版を勧め、一九九九年ロンドンのグラント・リチャーズ社から出版された。縦五インチ、横四インチの小さな絵本だった。絵本の古典となり、近年地域的に人種差別の批判を受けながらも幅広い人気は衰えない。作品に『リトル・ブラック・ミング』(一九〇一)、『リトル・ブラック・クイーブ』(一九一〇)などの連作のほか、『さんばとふたり』(一九一七)、『The Story of Little White Squibba』(一九一九)などがある。

(渡辺茂男)

バーンフォード シーラ Sheila Burnford 一九一八年 カナダの児童文学作家。スコットランドに生まれ、一九四八年にカナダへ移住。代表作『三匹、荒野を行く』(一九六一)は、老犬ブルテリアとラブラドル犬、シャム猫の三匹が、飼い主を求めてオンタリオ州の荒野を二五〇マイルも旅をする物語。映画化もされ

ている。ほかに、第二次大戦の戦火をくぐった犬の物語『ベル・リア』(七七)や、『第二の大洪水とノア』(七三)がある。

(桂有子)

バンベルガー リヒャルト Richard Bamberger 一九二一年 オーストリヤの教育学者、国際児童文学・読書研究所所長(一九六五年～八〇)、国際児童図書評議会会長(六二～六六)を務める。ウィーン大学でドイツ文学、英文学を修め、教師となる。戦後、児童文学および児童の読書問題の研究に専念し、国際的視野に基づいた児童の読書推進運動に尽力する。ウィーン市立教育研究所での児童文学ゼミナーを通じて教員養成にも力を入れる。現在、教科書研究所を設立するため世界各国に協力を呼びかけている。

(田中安男)

ヒ

ピアス フィリッパ Philippa Pearce 一九一〇～イギリスの童話作家。ケンブリッジ市南部のカム川べりの製粉家の娘に生まれ、ケンブリッジ大学で学士号